



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	米国管理下の南西諸島状況雑件 会談録（日・琉球首脳、政府高官）（44・1・9下田大使・屋良主席   外務省外交史料館レファレンス番号：H221339）
Author(s)	-
Citation	平成22年度外交記録公開(3)No.1   公開日：平成22年12月22日   外務省外交史料館管理番号：A'3.0.0.7-1(5)   CD・DVD番号：H22-009
Issue Date	
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43191">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43191</a>
Rights	外務省外交史料館所蔵資料

44  
19

下田大使  
屋良主  
席

昭44.1.9付「一般情報」第5号(抄)  
(注)本件会談の記録は作成せず。

会談に同席した千葉北米課長が  
会談後下田大使より「ブリーフィング」を  
を行った。

第 2 部

1. 人事消息

元参事官尾崎義氏は1月7日心筋硬塞のため世田谷区代沢の自宅で逝去された。享年65才。

葬儀、告別式は11日カトリック世田谷教会で執り行なわれる。

2. 北米課長ブリーフィング

○ 下田・屋良会談

(1) 本日の会談は、屋良主席の要望を下田大使が快諾して成立したものであり、本省で約30分間話し合った。

先ず下田大使より、ランバート次期高等弁務官に会い屋良主席のデリケートな立場を説明しておいたと前置きし、平和条約成立当時沖縄領有の意向のあつた米国の世論、中国の主張等に対処する妥協として信託統治という形で、日本の潜在主権を認めしめることになった平和条約第3条成立の経緯を説明し、沖縄の一日も早い本土復帰の実現が自分に残された殆んど唯一の任務であると考えているが、

7  
闘争という形でこれを実現しようとする  
ことは、早期復帰の阻害要因としかなら  
ない旨、こんこんと説明した。

(2) これに対し、屋良主席より、闘争とい  
われるが、これは、基地反対という沖縄  
県民の切望が組織された自然な姿であり、  
戦争中に大きな犠牲を受け、戦後も米軍  
の大基地が、朝鮮動乱、ヴェトナム戦  
争と関係してきたという沖縄の体験から  
基地に対し厳しい態度をとつていること  
を理解し、下田発言の誠意はわかるが自  
分の力では、何もなし得ない沖縄の立場  
を、B-52問題、原潜問題を含めて、  
対米外交に反影してもらいたい旨、要望  
した。

(3) 下田大使は、屋良主席の気持はよくわ  
かるとしつつ、日本に対し正論を吐いて  
いるライシ・ワー前大使が米国内で極め  
て不評なように、日本人でも、米国を本  
当に理解していると米国民から感じられ  
るような人物が必要であり、自分として  
は、かかる観点から、たとえ売国奴と言  
われても、すべてを沖縄早期本土復帰の

ために努力している、現在の問題は、復  
 帰が遅れても本土並みでいくか、あるい  
 は早期復帰のために暫定的に妥協するか  
 の二者択一であり、白紙という態度では  
 交渉にならないし、また、外交には、国  
 民的合意が必要であり、そのためにも、  
 闘争心をなくしていくことが必要である、  
 B-52については、批判もあるろうが、  
 暫定的駐留で、しばらく待てば解決する  
 と確信している旨述べた。

(4) これに対し屋良主席より、国民的合意  
 という名の下に沖縄だけにシワ寄せをす  
 ることは納得できないというのが自分の  
 立場であると説明、下田大使も、主席の  
 かかる立場には理解を示した。会談の雰  
 囲気としては大使・主席とも明治青年的  
 情熱をもつて話し合い、仮に互に立場が  
 入れ替っていたならば、やはり同じこと  
 をしたであろうとの印象が感じられた。

3. 一面トップ記事(9日夕刊)

朝日——「国鉄選賃値上げ決定へ——体質改  
 善条件に経企庁長官譲歩。」